

「天神の面」をめぐる

小田 幸子

「天神」と称する勢いのある表情の男性面がある。全体としては人間の相貌を持つが、银杏型の眼球に金具をはめて朱をさし、上下の齒列の先端を金泥で塗るなど、超人間的特性を示している。眉毛を逆立て、眼光は鋭く、ピンとはね上がった立派な八字髭を持つ。頬はたつぷりと肉付きが良い。全体は薄い代赭色に彩色する。お歯黒を染め、冠型を持つので、公家の顔と考えてよいだろう。現代の用法は、〈金札〉(天津太玉神)、〈淡路〉(伊弉諾神)、〈藍染川〉(天満天神)など後シテの神靈に掛ける場合と、〈舍利〉(韋駄天)、〈大空(帝釈天)、〈第六天〉(素戔嗚尊)などの後ツレに掛ける場合とがあり、後者の多くは、シテの鬼や天狗を調伏する颯爽とした神霊役である。また、〈田村〉(坂上田村麿)や〈加茂〉(別雷神)の特殊演出にも用いる(括弧内に役名を記した。以下、この面を『天神』と表記する)。『申楽談義』二十二条「面のこと」によると、観世座には観阿弥以来伝えられてきた由緒ある「天神の面」が存在していた。関連箇所を番号を付して以下に引用する。

- ① 出合の飛出、此座の天神の面、大癩見、小癩見、皆赤鶴也。
 - ② 大癩見、天神の面、もつばら観阿よりの重代の面也。
 - ③ 飛出は、菅丞相の柘榴くわつと吐き給へる所を打。天神の面、天神の能に着しよりの名也。
 - ④ 人の借り召されしを、不思議成霊夢有て、返されし面也。家に納めたてまつれ共、又霊夢有て、今も着る也。
- ①に言及する作者の赤鶴は、「近江」の「サルガク」(猿楽役者で、「鬼の面の上手也」と同条に記載がある。この記事と、同人作とする他の面を勘案すると、「天神の面」も鬼の面の一種と類推される。小稿で問題にしたいのは主として③だが、先に、「天神の面」にまつわる霊夢を述べた④をみておこう。推測を補ってわかりやすく意識すると、「ある方が貸してほしいと希望されたので、一時的にその方の手元に渡っていたが、観世座に戻すようにと天神の夢の告があり、返却してきた。家宝として秘蔵していたところ、能に着用する

ようにと再び夢告があったために、現在でも使っている」ということだろうか。世阿弥と天神の関わりは深い。④とは別に、天神の霊夢に関するエピソードが二例『申楽談義』第二十四条の世阿弥をめぐる霊験譚に記されている。ひとつは、世阿弥がまだ藤若と名乗っていた時代の出来事、もうひとつは、出家後の応永二十九年(一四二二)六十才の出来事である。詳しくは同書に依りたいが、霊告が力を持ち、人々を動かしていた時代の様相が伝わってくる。天神の神慮に預かった「天神の面」は、いっそうその価値を高めたことだろう。

さて、③によると「天神の面」の名称は「天神の能」に掛けたことに由来するという。当時「天神」といえば天満大自在天神(神として祀られた菅原道真を指すと考えられるから、「天神の能」は道真の相貌をかたどったものと推測される。ところが、最新の最も信頼される筑摩書房刊『能楽大事典』(二〇一二年)・「天神」の項では、③の記事にふれつつも、「この天神を菅原道真とするのが一般的であったが、その使用例から類推して広く天つ神(神道の神)あるいは天部の神(仏教の神)と解釈すべきであろう」として、「仏体面」に分類する。面が先に存在し、「天神の能」に使用して評判を取ったために後に名が付いたというケースを想定しているのだろうか。この見解に対してわたしは、作品と面の制作は一体関係

にあったと考える。その根拠は、人間と荒神の性格を兼備する『天神』の造形が、貴人から怨霊神へと変貌を遂げた道真の相貌を写したとみて矛盾がないこと、また、天神画像中に近似する作例が見いだせることによる。

中世以降多数描かれてきた単独の天神画像には、「怒天神」ないしは「綱敷天神」と称する憤怒相の作例が少なからず伝存している。「綱敷天神」とは、道真が太宰府に配流される途中、休むための敷物がなく船の艫綱を巻いて代用したとのエピソードに由来する。掲出の図は延文五年（一三六〇）の年紀を有する「綱敷天神像」（部分）で、年代の明確な最古の天神像とされる。全体図は綱を巻いた円座に座り、怒り肩で笏をぐっと構える。眉間に皺を寄せて睨み、眉毛を逆立て、上歯で下唇をかむ形相は、冤罪に憤る姿という。作例によって激しさの度合いは異なるものの、怒りの表情とポーズがほぼ共通する「綱敷天神像」は、天神像の一パターンとしてかなりの広がりをもせていたようだ。憤怒相の天神像は、ほかにも「白髪天神像」（一夜にして白髪に変じたエピソードに基づく）や、束帯姿の「束帯天神像」のなかにもみられるが、南北朝～室町時代の作という北野天満宮所蔵「根本御影」の険しい面貌は、目元などが特に『天神』に近い。もっとも、画像が特定できるわけではなく、「怒りを宿した公家の顔」が共通するに過ぎないとの見方もある。しかし、観阿弥・世阿弥時代に広く共有されていた道真の基本イメ

ージのひとつが「怒りの神」だったことは確実に視され、③の記述と併せた場合、『天神』が憤怒相の道真をモデルとしていた可能性は高まる。

「天神の能」についても確認しておこう。天神・道真を主人公とする現行曲は（雷電）・（藍染川）の二曲しかないが、古くは（菅丞相）（廢曲。近年復活上演された）や（一夜天神）（散佚曲。一部が謡物として残る）などがあった。前者は、法性房僧正（ワキ）を訪れた道真の霊（シテ）が鬼となつて、内裏へ向かう僧正を妨害するという内容で、「天神の能」と呼ぶにふさわしい。（雷電）はその改作と考えられる。一夜白髪伝承に基づく後者にも鬼姿の道真が登場していた可能性がある（詳しくは拙稿「天神の能」、『芸能史研究』73号、一九八一年四月に述べた）。いわゆる「柘榴天神伝承」に基づく謡物「妻戸」も伝存しており、「怒れる道真」は能のテーマとして好まれていた。

『天神』を複数の能に着用する理由については、「柘榴天神」を写した「飛出」を、モデルの道真個人を離れて幅広く使用する事情と同じだと考えれば解決がつく。ちなみに、『八条花伝書』巻五によると『天神』の使用例は（鶴飼）・（昭君）・（皇帝）・（嵐山）・（賀茂）にもみえ、必ずしも「天部」や「古代神」に限るものではなかった。古作「天神の能」が非上演曲となり、『天神』と道真の対応関係が不明確になった結果、「天つ神」とする解釈が生まれたのかもしれない。道真の憤怒相をかたどった「飛

出」・「天神」二種類の能面が制作されたことは、能面のモデル問題としても注目される。最後になったが、画像掲載許可をたまわつた常磐山文庫と国立能楽堂にお礼申し上げる。（能・狂言研究家）



「小天神」（国立能楽堂蔵）



常盤山文庫60周年記念図録
「常盤山文庫名品選 天神さま」より転載
「綱敷天神像」（部分。公益財団法人常盤山文庫所蔵）